

◆ 『Intelligence』購読会員の皆さまへ：ニュース・レターNo. 62（2019年6月号）◆

5月の十連休も過ぎ、東京も梅雨入りしましたが、会員の皆さまにおかれましてはお変わりなくお過ごしでしょうか。最新号の『Intelligence』19号が刊行されましたが、お手元に届いておりますでしょうか。ご愛読の会員の皆さまには、ニュース・レターとともに「Intelligence」会員専用ウェブサイト <http://www.bunsei.co.jp/ja/intelligenceuser.html> また、会員向けブログとあわせてご覧いただければ幸いです。また、20世紀メディア研究会は6月は29日、7月は20日に予定されています。こちらにも是非ご参加下さい。皆さまからのご意見、ご要望をお待ちしております。

【ブログ用エッセイ募集】

会員向けブログでのエッセイは、お楽しみ頂いておりますでしょうか。会員向けブログでのエッセイは、すでに第31回を重ねており、志村三代子さん、賀茂道子さんをはじめ、いろいろな方の研究上の興味深い逸話をご執筆いただいております。このブログのエッセイの執筆希望者を、購読会員の中から募っております。研究に関する小話やヒント、資料紹介などを会員向けブログに掲載なさりたい方は、お原稿をお待ちしております。原稿の長さは千字程度、写真を二葉そえてご提出下さい。詳しいことは、事務局までご連絡下さい。

なお、研究会当日に配布されたレジュメは、会員ホームページにアップされています。<http://www.bunsei.co.jp/ja/intelligenceuser.html> をご覧下さい。

【第127回研究会】（5月11日（土）14時30分～17時30分）

● 鈴木航（早稲田大学非常勤講師）

「1930年代中国の地方建設と官報の『雑誌』化」

浙江省政府建設庁の機関誌から始まった『浙江建設』が、名称を変えながら「雑誌化」していく過程と、当時の浙江省が抱える党と政府の対立との関わりについて考察いただきました。官報の雑誌化とは、制限つきではありつつも、政府を批判する異論を包摂して地域を統合しようとする試みであり、当時の国民党が統制ばかりでなく、政府管理下において地方の言論空間を拡張しようとしていたと位置づけられました。

● 黒宮広昭（米インディアナ州立大学）

「ロシヤ・ソ連の諜報と挑発及びその特性」

第二次世界大戦開戦前夜の旧ソ連における諜報活動は非常に高いレベルにあったという趣旨のもと、その特徴はどのような点に求められるのか、主に偽情報 disinformation の観点から広範囲にわたって考察を試みる発表であった。旧ソ連の諜報に関わったエージェントの暗躍が、戦時下の日本に浸透していた可能性にも言及があり、正史には記録されることのない諜報員たちの存在が、現在の国際秩序にも影響を残していることが示唆された。

●4月以降の20世紀メディア研究会の開催予定は、6月29日（土）、7月20日（土）に予定しております。研究会でのご報告御希望の方は、20世紀メディア研究所事務局 [m20th@list.waseda.jp](mailto:m20th@list.waseda.jp) まで、メールにてご一報下さい。

【コラム】 専修大学カストリ雑誌コレクションを見てきて

4月、専修大学生田キャンパス図書館で開催されていた春の企画展示「時代にゆれた表現の自由 — 江戸から平成、そして〇〇 —」を観てきた。会場では、江戸時代、戦前、戦

中、戦後から現在まで、規制に翻弄されながらも出版された多くの資料が展示されていた。中でも、初出品となる「カストリ雑誌コレクション」に注目していたこともあり、ちょうど大学関係者に誘われたこともあり、足を運んでみた。

2000年代初頭から、筆者も20世紀メディア研究会の占領期雑誌研究会で雑誌研究に取り組んできたのでカストリ雑誌にも少なからぬ関心を寄せてきた。また2016年の研究所主催の早大中央図書館「福島鏗郎コレクション」でカストリ雑誌展示を担当したこともあり、ある程度の資料勘もあった。資料的には、プランゲ文庫にも国会図書館にも早稲田大学福島寿郎旧蔵資料、同志社大学山本明文庫にもないものが、唯一無二のカストリ雑誌であるとの認識もできつつある。

そうした中で、専修大学の「カストリ雑誌コレクション」では、展示された雑誌以外にも、書庫の全235誌(295冊)を、教員・図書館の方々のご厚意により見せて頂き、所蔵リストも拝受した。一部、1928～1933年の戦前のもものも含まれているが、その形態・内容も戦後期のものに近く、むしろこれらの雑誌スタイルが戦後カストリ雑誌にもつながっているとも考えられ興味深かった。これらコレクションは、風俗資料収集家であった石崎正吾氏より1990年頃、大学に寄贈されたという。

筆者としては二つの課題を頂いたと認識している。一つは、専修大学にしか所蔵されていないカストリ雑誌はどの雑誌かということ。もう一つは、これまでも繰り返されてきた、「カストリ雑誌」というカテゴリーの問題。すなわち、どこからどこまでがカストリ雑誌の範囲であるかという明確なコンセンサスは、まだ確立していないように見える。前者については、今後、リストの照合作業が残されており、後者の問題は未解決の大きなテーマでもあるので、参考となるような指標、定義を考えていきたいと思っている。

[6月10日付 文責：吉田則昭]